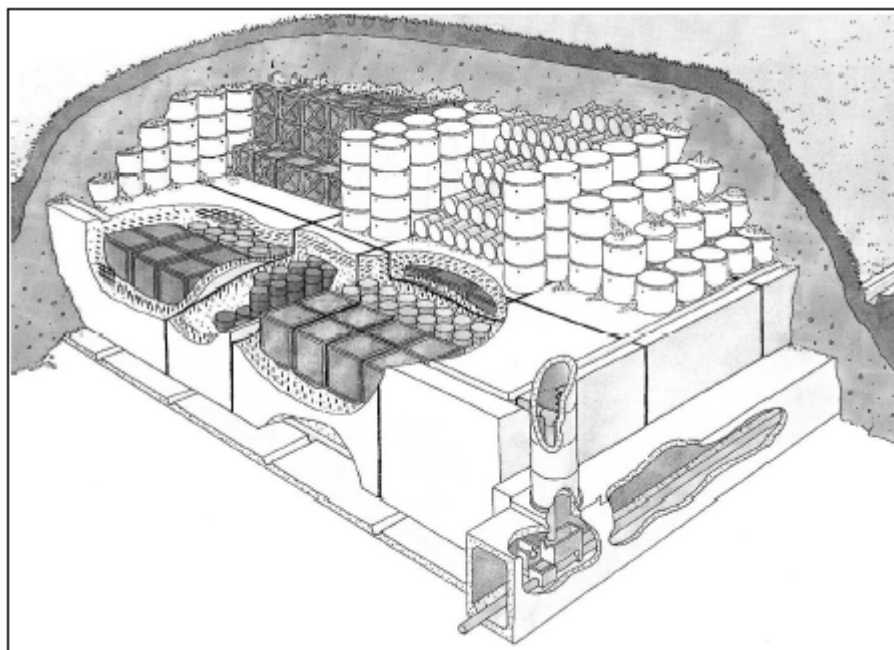


GREENPEACE

核廃棄物の管理

～ ラマンシュ低レベル廃棄物貯蔵センター（CSM）の教訓

報告書要約



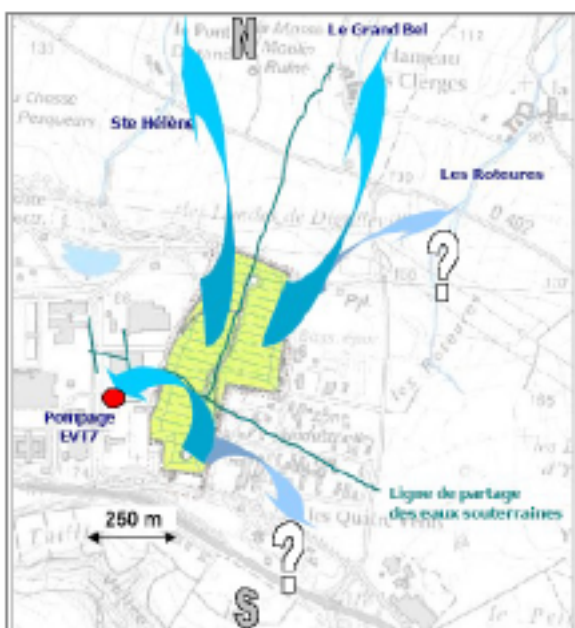
CSM核廃棄物処分場の断面図

- ・ ラマンシュ貯蔵センター（CSM）の放射性廃棄物地上処分場へは、1969年から1994年まで、25年間にわたり放射性廃棄物が捨てられていた。52万立方メートル以上の体積となる放射性廃棄物が、140万本以上のドラム缶に詰められて処分されたことから、ここは世界でも最大級の処分場であると言える。
- ・ これらの廃棄物の中で、フランスの電力会社EdFが所有する原子炉から出た使用済み核燃料を再処理した際に発生した物が主である。その他には、およそ59000立方メートルもの体積になる海外分の廃棄物が、CSM処分場へ捨てられている。全体の11パーセントを占めるこれらのうち、54%がドイツ、28%が日本、7%がスイス、そして5%がオランダに起因する。フランスの法律に従えば、フランス国内で海外分の廃棄物を処分することは許されていない。
- ・ 1996年に政府によって任命されたテュルパン（Turpin）委員会は、当該処分場は、低レベル廃棄物を貯蔵するようには設計されていないにも関わらず、長寿命や高い放射能を持つ放射性廃棄物も混在しており、また、内訳が明確に把握されていないとの結論に至った。また、処分場から周辺環境へ放射能が漏れだしていることが明らかになった

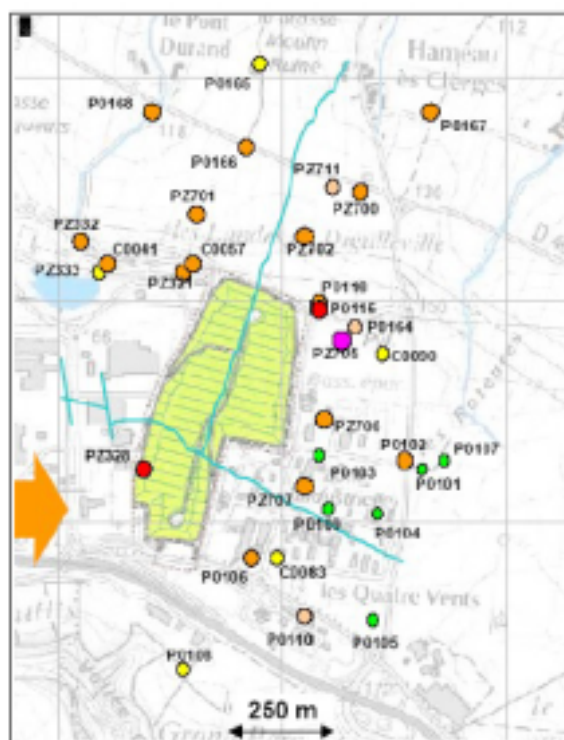
GREENPEACE

が、廃棄物を解体、そして再度修復を試みようとする経済的な負担が大きくなり、また労働者への重大なリスクが伴うかもしれない、という結論に至った。

- ・ 雨水や地下水がCSM処分場を通ることにより、放射能が漏れだしている。汚染された水の一部はコジェマ社によって集められ、排水管を通して海へ垂れ流されているが、それほど汚染されていない水は、セントヘレナ川へ放出される前に希釈され、その他は地下の帯水層へ染み込むことによって処分場周辺へ広がっている。
- ・ 汚染水は帯水層から汲み上げられ、家畜用の飲料水などとして利用されている。このような場所では、トリチウム（放射性水素）の平均値が1リットルあたり約750ベクレルにも上り、これは欧州の安全制限値である100ベクレル/リットルの7倍以上にもなる。2005年には、処分場に近い農業用地で地下水から平均9000ベクレル/リットルという、安全制限値の90倍にも上るレベルの放射能が検出された。
- ・ トリチウムは環境中を移動し易いので、他の核種による将来的な汚染の目安となる。これら他の核種として、ストロンチウムやセシウムなどの核分裂性物質や、長寿命で非常に放射能による毒性の強いプルトニウムなどが挙げられる。



上図：
地下の帯水層における汚染水の
主要な分布経路



右図：
地下の帯水層より検出された
トリチウムによる汚染状況

